

日本マンドリン連盟の在り方を考える

序文

日本マンドリン連盟の役員は平成21（2009）年度に任期2年の改選を迎えます。これに連動して北海道支部でも支部役員が改選されますが、ここ数年、一部の役員は以下のような活動を展開しており、弊会でも多大な迷惑を被りました。

- ・ 主宰者の許諾を得ずに非加盟団体の定期演奏会に練習不足のまま乱入出演して演奏を破壊し、記念写真に納まるばかりか打ち上げにも参加
- ・ 夫人を使ってサボタージュを扇動し、非加盟団体の分裂を画策
- ・ 非加盟団体の定期演奏会に関する虚報を捏造して印刷物に掲載し、公の行事の場で広範に流布
- ・ 母校の部室に乱入して後輩の制止を振り切って楽譜をコピーして略奪し、自分の社会人団体に演奏
- ・ 自らの意思で退会した演奏団体の名称を無断で使用
- ・ インターネットを通じて演奏団体や主宰者の誹謗中傷を実施
- ・ 機関紙「JMUジャーナル」の支部会員に対する配布を自己都合により3週間以上も遅延

まさに支部会計から報酬を得ているのに恥じない熱心な（非加盟団体に対する破壊）活動ぶりですが、このような役員連中が一日も早く排除されることを会員の良心に訴えたいと思います。

実は、北海道支部では平成11（1999）年2月に前支部長の田中稔夫氏（北海道教育大学札幌校マンドリンクラブOB・OG会会長、現・日本マンドリン連盟本部顧問）が支部長に就任した際、自分は多数決による選挙を制して選任されながら「これまでの支部役員選定には不正があった」として「役員選考委員会」なる組織による密室選考を行うように規約を改正し、以降、上述のような不祥事が続出するようになりました。

しかし、そもそも会員数が100名にも満たないような趣味の世界の親睦組織に「役員選考委員会」などを置かなければならないということ自体が既にして親睦組織の性格を放棄していることに他なりません。

平成20（2008）年先日11月30日をもって同委員会による新役員推薦が締め切られ、筆者も未来を託すのに相応しい人材を推薦させていただきましたが、今回は北海道支部も含めた日本マンドリン連盟の在り方について考察してみたいと思います。

日本マンドリン連盟の存在意義と活動目的

最初に考えなければならないのは「**そもそも連盟とは何のために存在し（今）何をなすべきなのか**」ということです。

本来であれば他のジャンルの「連盟」や「協会」と同様、「マンドリン音楽の振興を図る」ことを大義として掲げたいところですが、我が国のマンドリン音楽の現状を他の音楽ジャンルと比較した、あるいは国際的な視点で見ると、北海道であろうがなかろうが、そのような立派な御題目を掲げるようなレベルにないことは明らかです。

マンドリン音楽のショボさは吹奏楽や合唱と比較すると明らかですが、吹奏楽には国家儀礼のために国が創設して運営している自衛隊の各音楽隊ほか公的機関の附属音楽隊があり、民間（アマチュア）には小学生から社会人まで各段階に応じた全国的な演奏コンクールがあります。

合唱は学校の音楽教育で最も一般的な歌唱を土台としており、その意味では公的組織が普及に当たっていますし、吹奏楽と同じく民間（アマチュア）には小学生から社会人まで各段階に応じた全国的なコンクールがあります。

これに対してマンドリンは、合奏に関しては公的あるいはプロの合奏団は存在せず、プロと称する独奏者は存在しても（ある意味いい加減な）レッスンや楽器販売のマーゲイン収入が主体となっており、定期的に開催されている全国的な演奏コンクールも独奏と高等学校の部活動による合奏を対象としたものしかありません。いずれも「**民間の任意団体が勝手に運営している**」御粗末な状況にあります。

もしも「**マンドリン音楽の振興**」を本気で図りたいのであれば、**先ず官公庁や政治家を通じて国や地方自治体に働きかける必要があるでしょう。そのためには演奏経験者を含めてマンドリン音楽に理解のある国会議員や財界人に応援を求めたり、文部科学省OBを受け入れた全国組織を創設して運動を展開することが必要となりますが、そのような組織的な運動があったという事実は未だかつて聞いたこともありません。**

以上を読んで「そんなこと出来る訳ないだろ」と思った方は、正常な感覚の持ち主です。

なぜなら、それが即ち我が国におけるマンドリン音楽の現状であるからです。

したがって、**日本マンドリン連盟が「今」なすべきことは「マンドリン音楽の振興を図る」ことではない**といえるでしょう。

ちなみに平成19（2007）年に改正された「日本マンドリン連盟規約」の第3条には「本連盟はマンドリン音楽の普及発展ならびに会員相互の親睦を図ることを目的とする」（第2章「目的および事業」）とあります。しかし、マンドリン音楽の現状は、正攻法で普及発展（＝振興）を行なうような段階にないことは明白です。

そのように考えると「**振興を図るための新体制を構築する**」ことこそが、**連盟が今なすべきことである**といえるのではないのでしょうか。「体制の構築」ということは、即ち国内の全てのマンドリン関係者を可能な限り組織化することです。その関係者には（アマチュアの）各合奏団の参加者はもとより、マンドリン音楽を作曲したことがある作曲家、（内容や音楽的価値はともかくとして）個人のプロ演奏家、楽器製作者、楽器販売店、そのほか過去にマンドリン合奏団を指導した経験があるプロの指揮者、学校の部活動の顧問を務める音楽教諭、マンドリン関係の資料を所蔵する図書館なども含まれなければならないでしょう。そうした**全ての関係者の力を結集しなければ「マンドリン音楽の振興」は不可能なのです。**

めざすべき組織形態と活動内容～具体的に何をなすべきか～

これは一見困難な事業に思えますが、何がネックになっているのかを考えて、その問題をクリアすれば簡単に実現できると思います。それは「**特定の人物や団体を指導的な地位に付けない**」ということです。

特に**アマチュアを顧客にして所得を得ている楽器販売店やレッスン・プロなどを役員等に就任させ、あるいは指導者として招き入れるのは論外**で、組織の他の参加者に対する影響力は絶対に行使させてはなりません。むしろ、そうした立場の参加者には金銭的な支援を求めるべきであって、それができないのなら皆で排除することも辞さないほどの**毅然とした態度が必要となる**でしょう。

プロについては、指揮者、演奏家、作曲家に関しても当初は同様であるべきです。そんなことでマンドリン音楽の普及発展が図れるのなら、今の体制のままでも、とっくの昔に目標が実現されている筈ではありませんか。

大変申し訳ありませんが、**彼らが音楽全般あるいは世界的レベルでみると、技術・知識・感性・社会的影響力等を含めて必ずしも一流の人物とはいえないことが今日のマンドリン音楽の惨状を招いた**ともいえるのです。

それが現在の日本マンドリン連盟であらねばならないか否かは別として、マンドリン音楽の現状を考えた際、**統括組織は先ず振興を図るための組織化そのものを目指すべき**です。そのためには特定の個人（特にプロ）や団体が利益を得ることのないような、また過去のしがらみの影響を被らないような組織形態が求められます。

もちろん関係者を網羅した相当規模の組織が構築できたとしても、組織形態などから直ちにマンドリン音楽振興のための具体的な活動が展開できる訳ではありません。**最初に行なうべきことは情報交換の促進**でしょう。

マンドリンは全国規模の大会が少ない上に、大会参加者の比率が愛好者数もしくは演奏団体数と比較して少な過ぎます。その詳細を報道するメディアもありません。NHK-FM等による全国放送も無きに等しく、CDもマイナーな存在で現物を見たり試聴してから購入することができないのです。

第一段階としては、どこに何という演奏団体や演奏者が存在して、どのような演奏活動を行っているのかという情報を可能な限り詳しく収集し、それを組織を通じて流すことです。こうした活動を続けて行くことによって自分達の演奏や選曲が他と比較して如何なる状況にあるのか、だんだんと分かって来るでしょう。これも一種の啓蒙活動だといえるのかも知れませんが、**特定の個人や団体の価値判断を押し付けることのないよう、量的に多くの情報を提供して選択させ、参加者自身に判断させることが重要です**。どのような情報が求められているのかは情報を提供した側にも明確に認識できるので、次の段階の活動方針も見えて来るでしょう

こうした**目的に適した組織は「本部－支部－会員」といったピラミッド型の組織ではなく、会員が相互に対等に情報を受発信できるネットワーク型の組織であることは明らかです**。また、その組織形態はインターネットが提供する各種ツールにそのまま合致しているものでもありません。

「それではパソコンを使えない高齢者が参加できないのでは？」といった懸念もあるかと思いますが、携帯電話や家庭用FAXの普及を考えると、従前よりもネットワークへの参加環境

は整ってきたといえるのではないのでしょうか。もちろん、紙ベースの資料配布は若干残さざるを得ないでしょうが、その場合は送料やプリント代等を御負担いただく形になるでしょう。

いずれにしても、組織への参加者は現在の日本マンドリン連盟よりも大幅に拡大しますから、参加者に求める費用負担も最小限に止めたいし、機関紙や会報など紙ベースの出版物は費用が嵩むので極力避けたい所です。

ケーススタディ～北海道の場合～ 【I】組織編

日本マンドリン連盟といいますか、マンドリン音楽の振興（普及・発展）を図るべき統括組織の当面の活動内容と組織形態についての持論を述べてきましたが、こうした観点から北海道の現状と問題点をみてみましょう。

実は、北海道では昭和43（1968）年の日本マンドリン連盟結成に先立って、既に北海道プレクトラム連盟なる組織が結成されていました。当時の北海道には、オルケストラ・シンフォニカ・タケキで武井守成御大に師事した九島勝太郎先生という関係者なら誰が見ても第一人者と納得せざるを得ないパイオニアが存在していました。北海道プレクトラム連盟は文化人としても各方面に幅広い交友関係を持っていた九島先生の発議によるものですから、立ち上がりも極めて自然であったようです。

ちなみに北海道で最も歴史が長いマンドリン・ギター合奏団は北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」（以下「アウロラ」と記載）で、現在でも同団体が最大の人員規模を誇っているほか、年によって変動はあるものの演奏レベルでも上位にあります。九島先生は北海道大学の卒業生ではなかったのですが、草創期から常任指揮者として迎えられ、定期演奏会では学生指揮者とは別に1ステージを持っていました。

その次に北海道内で歴史の長い団体は、九島先生が主宰していた社会人団体の札幌プレクトラム・アンサンブル（以下S. P. E. と記載）ですが、現在、同団体の規模をみると、定期演奏会の際は「外人部隊」を広範に受け入れて大規模な編成に膨れ上がるもののコアなメンバーは少なく、客観的に見た演奏レベルも（「外人部隊」のせいで？）どちらかという低い状況にあります。少なくとも「アウロラ」とは比較の対象にもならないでしょう。

筆者が九島先生の指揮する両団体の演奏を聴いたのは晩年の数年間のみでしたが、音楽的にはいかなものかと思う部分が少なくなかった記憶があります。しかし、筆者の師匠である弊会の森田太郎主宰は「アウロラ」OBでS. P. E. にも参加しており、「あの頃の九島さんは凄かった、曲の組み立ても武井先生直伝だったのだろう」と繰り返し語っているので、往年の九島先生の実力やS. P. E. の演奏レベルは、当時としては高かったのだと推察せざるを得ません。

この間、さまざまな経緯がありましたが、現在の日本マンドリン連盟北海道支部は北海道プレクトラム連盟の系譜に連なる組織だといえるでしょう。こうした統括組織の肝煎りとなるのは年の功や資金力からいって社会人とならざるを得ませんが、以上のような経緯から、支部開設時は九島先生を支部長に戴き、S. P. E. のメンバーが運営を仕切る形となりました。

しかし、九島先生の晩年の頃になると、地元に残ってS. P. E. 以外で熱心に演奏活動を続ける「アウロラ」卒業生、あるいは別の系統の演奏団体も増えてきました。

それにも関わらず**S. P. E. メンバーの一部は「北海道支部＝S. P. E. 」という固定**

観念の妄執に囚われており、それが本稿の初回で述べたようなトンデモ役員が跳梁跋扈する根本原因になっているのです。

余談になりますが、日本のマンドリン・ギター合奏団は<マンドリン・オリジナル曲を中心に演奏する団体>（代表例として同志社大学マンドリンクラブ）と<ポピュラー音楽を中心に演奏する団体>（同：明治大学マンドリン倶楽部）に大きく二分されます。近年はクラシック音楽からの編曲物を中心に演奏する団体も増えてきましたが、その団体の当初の演奏活動、あるいは奏者の出身大学や師弟関係を辿ると、やはり両者のいずれかに行き着きます。

もう少し敷衍すると、武井守成系か古賀政男系かということになるのでしょうか、その雰囲気の違いはマンドリン・ギター合奏で演奏経験を持つ方なら誰でも認識できるかと思います。

そして、従来は「マンドリン・オリジナル曲を中心に演奏することこそが芸術である」といった妙な思い上がりがある一方、「自分達が楽しむために音楽をやっているんだからマンドリン・オリジナル曲なんか演奏してられるか」といった意固地な考え方もありました。

<演奏を通じて音楽による芸術表現を追求する>のか<演奏行為でストレスを発散し快感を求める>のかという活動目的の相違は、本来は演奏のジャンルとは別の問題である筈ですが、それが同一視されてきたことが我が国のマンドリン・ギター合奏が世界の音楽的な潮流から大きく取り残されてしまった大きな要因であるように思われてなりません。

しかし、北海道においてはマンドリン・ギター合奏のパイオニアが故・九島勝太郎先生であったことは古賀政男系の演奏団体の関係者も含めて誰もが認めるところであり、九島先生本人は古賀政男や明治大学マンドリン倶楽部を忌避しておられましたが、九島先生が連盟という組織の要にある限り一応のまともはみせていたのです。

さて、故・九島勝太郎先生の音楽活動のホームグラウンドであった札幌プレクトラム・アンサンブルという社会人団体は、会長の九島先生が武井守成主宰のオルケスタ・シンフォニカ・タケキにいたというほかに、発足当時は楽器を購入して演奏すること自体がある程度豊かであればできない時代でもあり、そこに旧制・北海道帝国大学のチルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」で九島先生の指導を受けた医師や若手経営者も加わったため一種の社交サロンのような上品な雰囲気を持っていたようです。実は筆者が幼年時代に住んでいたアパートの下の階に札幌プレクトラム・アンサンブルでマンドラ・テノーレの首席奏者を務めていた方が住んでおられ、犬のぬいぐるみを買ってもらうなど大変可愛がっていただいたのですが、子供心にも非常に御洒落で素敵な御婦人だったという記憶が残っています。もちろん、その頃はマンドリンという楽器も所属している演奏団体の名前も知らなかったのですが…。

しかし、現在の札幌プレクトラム・アンサンブルには、そのような上品な雰囲気はなく、むしろ下品で野蛮な人物が数多く集積しているように感じられます。弊会の森田主宰も旧制「アウロラ」OBで札幌プレクトラム・アンサンブルに参加していましたが、雰囲気が変わったのは新制「アウロラ」の出身者が増えたからだといひ、特に北海道教育大学札幌校マンドリンクラブを創設した田中稔夫氏とその後輩グループが参加するようになってから「下品でガラが悪くなった」と語っています。

国家の柱石たる人材を育成することを目的としていた旧制帝国大学と、戦前は師範学校に過ぎなかった新制の教育大学とは同じ大学という範疇で比較するのが憚られるほど教育理念やカリキュラムが異なり、両者の卒業生の肌合いが合わないのは理解できますが、昨今の学校教育に対する数々の批判をみても教育大学出身の教員というものが非常に特殊な世界の住人であ

ることは理解できるでしょう。

職場における上下関係と直結した強力な先輩後輩関係で結ばれた北海道教育大学札幌校マンドリンクラブの卒業生は「**田中**天皇」との異名を取る **田中稔夫**氏を筆頭に部内で着々と勢力を拡大し、ついに九島先生亡き後、旧制「アウロラ」出身の常任指揮者・多田久志先生（故人）を差し置いて同氏が二代目会長に就任するに至りました。

田中氏はことあるごとに「九島イズムの継承」を口にしましたが、**その音楽は九島先生が受け継いだ武井守成の音楽とは全く異質のものであり、めざしたのは「九島先生から札幌プレクトラム・アンサンブルの会著職を継承した自分が北海道におけるマンドリンの頂点に君臨すべきである」という権威主義だけでした。**

日本マンドリン連盟北海道支部の迷走は、この「**田中**の野望」から始まったといっても過言ではありません。

ケーススタディ～北海道の場合～ 【Ⅱ】役員編

1993（平成5）年に九島勝太郎先生が逝去された後、日本マンドリン連盟北海道支部の支部長をお願いできるのは多田久志先生をおいて他にないというのが衆目の一致した見方であったと思います。

多田久志先生については以前にも「資料室だより」で追悼の一文を書かせていただいたことがありましたが、北海道帝国大学時代のチルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」OBで札幌プレクトラム・アンサンブルで常任指揮を務めていたこともさることながら、かつては若手経営者としてJC（青年会議所）で活躍されたほか、ゴルフの世界でも北海道における重鎮として普及とマナーの向上に尽力され、人徳円満で各界の有力者と幅広い交友関係を持つ統括組織の「顔」としては申し分のない方でした。音楽関係でも札幌交響楽団の評議員を務められ、特定の演奏ジャンルにこだわらない柔軟な嗜好であった一方、武井守成作品の指揮では繊細な演奏を聴かせるなど感性や教養の面でもアマチュア音楽家として十分な能力をお持ちであったと見受けられました。

当時、筆者も多田先生に支部長をお引き受けいただくよう交渉したのですが、当時は御体調が思わしくなかったこともさることながら、「自分は札幌プレクトラム・アンサンブルの会長ではないから」ということで断られてしまいました。これは「**自分は社会人団体最古の札幌プレクトラム・アンサンブルの会長であるから日本マンドリン連盟北海道支部の支部長に推戴されるのが当然だ**」という**田中稔夫**氏の考え方とは異なり、「主宰団体を持たない人間が業界を統括する組織のトップに就任することはできない」という財界人としては当然のモラルによるものであったようです。逆に多田先生は、後輩の「アウロラ」OBである弊会の森田主宰を支部長に推されました。

森田主宰は現時点ではもちろん、当時でもマンドリン・ギター関連では国内有数の楽譜コレクターであり、複数の高等学校でマンドリン部を創設して顧問を務めたことから北海道内の各大学に進学して課外部活動で活躍した弟子も多く、現代ドイツ物を含む数多くの作品を初演して学生団体のレパートリー拡大に多大な影響を及ぼすなど業界の指導者としては十分な実績があったと思います。ただし、多田先生のような業界以外との幅広い交友関係はなく、自分の音楽に自信を持っていた半面、演奏ジャンルが異なる演奏団体に対しては無関心を貫いていまし

た。

このように同好他団体とは敢えて積極的な交流を避けてきたこともあって森田主宰は支部長就任に相当な難色を示していましたが、結局は多田先生の説得もあって就任を受諾することとなりました。これが**田中稔夫氏**を中心とする札幌プレクトラム・アンサンブルの一部会員や北海道教育大学札幌校マンドリンクラブの一部OBの猛反発を招くこととなったのですが、それでは何故、札幌プレクトラム・アンサンブルの皆さんは多田先生を会長に推さなかったのでしょうか？

この辺りの事情は他団体のことでもあり、今となっては「真相は闇の中」ですが、森田主宰の二代目支部長就任以後、陰湿な妨害工作が続いて多大な心痛を掛けてしまったことを思い起こすと、やはり三顧の礼をもって多田先生の説得を続けるべきであったと悔やまれてなりません。

ケーススタディ～北海道の場合～ 【Ⅲ】活動編：札幌市民劇場マンドリン・コンサート

日本マンドリン連盟北海道支部では初代支部長・九島勝太郎先生が逝去された後、最適任と見られていた故・多田久志先生が前述のような経緯で2代目支部長就任を固辞され、結局は多田先生の説得もあって弊会の森田太郎主宰が支部長に就任することとなりました。もちろん、当時の支部規約に基づく支部総会における満場一致の承認決議を経た選出でしたが、その**在任期間中は反対グループによる陰湿な活動妨害の連続であった**といっても過言ではありません。

一般に活動目的や演奏ジャンルが異なるマンドリン・ギター合奏団はパラレルワールドとして存在し、演奏内容に関する相互の批判はあったとしても直接的な活動妨害などあり得ません。しかし、北海道の場合は、九島勝太郎先生の遺産ともいえるべき特殊な事情があったのです。

現在、北海道には世界的水準の音楽専用ホールである札幌コンサートホールk i t a r aを始め各地に立派な演奏会場が存在しますが、それらの嚆矢となったのが1958（昭和33）年に竣工した今は無き札幌市民会館でした。九島先生も北海道内の文化人等と共に、その建設促進を働き掛けてきたのですが、当時の北海道あるいは札幌市における文化活動のレベルでは収容人員1,500名規模の多目的ホールの利用は伸びませんでした。

そこで特に空きが目立っていた平日を開放して市民文化の向上に寄与しようと翌1959

（昭和34）年に「札幌市民劇場」という制度が創設され、九島先生と札幌市および札幌市民会館との深い関わりもあって市内の各演奏団体の合同による「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」が開催されることとなりました。

この「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」は1960（昭和35）年に「第22回札幌市民劇場」として開催され、翌1961（昭和36）年には小樽、砂川、美唄の演奏団体も参加し、それを契機に全道の同好団体に呼び掛けて「北海道プレクトラム連盟」が結成されました。これは1968（昭和43）年に日本マンドリン連盟が結成されるのに7年も先駆けた動きでした。

「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」は、公的機関（札幌市民芸術祭実行委員会・札幌市・財団法人札幌市教育文化財団の3者が主催となっているが実質的には札幌市）が主催する日本で唯一のマンドリン・ギター合奏の演奏会であったほか、学生団体と社会人団体が100名以上の規模で合同演奏を行う点に特徴がありましたが、運営に関しては問題も孕んでいました。

その第一は、札幌市の行事であるため、北海道プレクトラム連盟あるいは後に発足した日本マンドリン連盟北海道支部が単独で主管組織になることができない（という固定観念に当時の関係者が囚われていた）ことでした。

その第二は、札幌の演奏団体を中心とした合同合奏を行う都合上、その指揮者は各団体の常任指揮者によるローテーションによって概ね自動的に決定する方向に収束していったことです。

これらが内包する矛盾は九島先生の逝去前後に顕在化し、その問題に森田主宰も巻き込まれることとなったのです。

「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」運営上の問題点の第一は、1992（平成4）年5月24日に開催された第693回札幌市民劇場の終了後に発覚しました。

札幌市民劇場という公的制度は、年度毎に公募を行って採用された公演企画に対して運営費の一部に補助が受けられるというもので、現在でも続いています。マンドリン・コンサートについては制度の創設当初から継続して開催されてきた参加出演者／観客動員数の両面で規模が大きな企画であり、文化関係で各種の公職を務めておられた九島勝太郎先生のお力もあって選に漏れるということはありませんでした。

それだけに「なぜマンドリンだけ特別扱いなのか？」といった声も強まりつつあったようで、会場使用料と概ね同額であった補助金が同年度から減額となったのです。

本来であるならば、補助金の減額が決定した時点で参加費を値上げすれば済んだ話ですが、その赤字分を当時の日本マンドリン連盟北海道支部事務局長であった**永田幸弘氏（札幌プレクトラム・アンサンブル会員、北海道教育大学札幌校マンドリンクラブOB）**が個人で負担していたことが決算に記載された不自然な寄付金勘定によって明らかとなりました。さらに**前払いである翌年度の会場使用料も同氏が立替払いしていた**ことが判明したのです。

一般に**職場が役所であれ企業であれ、公金は横領してもクビですが、個人が勝手に立替払いするのも御法度**であることはいまでもないことであり、善意で御負担いただいていたとはいえ、けっして誉められた行為ではありません。

このような異常事態が罷り通ってきた背景は、この制度でいうところの主管（＝実質的な行事の主権者）に「札幌プレクトラム連盟」という名目のみの架空団体が日本マンドリン連盟北海道支部と対等か上位の存在として併記されていたことに象徴されるでしょう。当然のことながら、架空の団体には収支決算も、その報告義務も、さらに運営全般をチェックして承認するシステムも必要ありません。

永田幸弘氏は、これに先立つ1992（平成4）年3月14日に開催された日本マンドリン連盟北海道支部第23回総会で新役職が決議される以前は頑なに「事務局代表」と称していましたが、氏の起用は日本マンドリン連盟北海道支部長たる九島先生の指名によるものであったと聞いています。確かに当時は支部会員の大多数が札幌プレクトラム・アンサンブルに所属していたのは事実ですが、半面、**支部の活動は極度に不活発となっており、新規加入の勧誘もほとんど行われていなかったほか、本部会報の配送すら満足に行なわれておらず、会費の徴収状況などを記した帳簿類も皆無であるなど、組織としては体をなさない状況にありました。**もちろん、幹事長でも事務局長でもない「事務局代表」などという中途半端で無責任な役職を名乗る者に実務を取り仕切らせていたことにも問題があります。

そもそも「札幌プレクトラム連盟」という名称からして「北海道プレクトラム連盟」とも何ら関係なく、札幌プレクトラム・アンサンブルの延長線的な意識から命名されたような印象を

受け、要するに身内に対する甘えから杜撰な運営に流れたということでしょう。

結局「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」は翌1995（平成7）年5月21日に開催された第784回札幌市民劇場をもって終了し、翌年度からは同種の年間行事として「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」が同時期に開催されていますが、同音楽祭の実質的な行事主催者が日本マンドリン連盟北海道支部（制度上は「協力」と呼称）のみとなっていることを考え合わせると、個人の独断による不祥事が隠蔽され得るようなシステムが続いてきたのは当時の関係者が囚われていた奇妙な固定観念によるものであったと断ぜざるを得ないのです。

余談ながら、日本の伝統的な統治システムにおいては「組織の代表者たる権威者」と「組織の実権を握る権力者」が二元的に存在し、不祥事が発生した場合の責任は後者の部分にとどまるのが通例です。これは、終戦の際にA級戦犯と認定された人々に全ての責めを負わせて天皇に責任が及ぶのを防いだことや、政治家の汚職が発覚すると必ず秘書が逮捕されたり自殺したりすることを思い浮かべていただければ理解できるかと思いますが、昨今の問題点は後者が官僚という集団になって問われるべき責任が拡散していることでしょう。

「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」で発覚した金銭上の不祥事に関しても、このような伝統的な手法が採られることとなりました。

本件に関しては問題発覚の翌年度から参加費を値上げした一方、当時の副支部長であった故・鈴木進氏（函館北方マンドリンクラブ代表、北海道大学チルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」OB、札幌プレクトラム・アンサンブル会友、2007年6月23日逝去）が札幌市内の社会人団体やその指揮者等を訪ねて寄付を募り、基金を設けて赤字や次年度の前払い会場費を負担させ、永田幸弘氏個人の金銭負担に関してはありがたく寄付金のまま処理して表沙汰にしない方向で収拾が図られたのです。これによって同氏を任命した「九島天皇」に責任が及ぶことはありませんでした。

ただ、残念なことに「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」にこのような措置が講じられた翌1993（平成5）年5月9日開催の第722回札幌市民劇場の練習中、九島勝太郎先生は入院して指揮を降板され、その年の9月26日に87歳で逝去されました。

ケーススタディ～北海道の場合～ 【IV】活動編：札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭

さて、後任となった弊会主宰の森田太郎新支部長は、九島先生が遺したもう一つの遺産ともいべき「札幌市民芸術祭ギター・マンドリン音楽祭」を巡る問題に直面することとなりました。

同音楽祭は1980（昭和55）年から毎年秋に開催されてきたギターまたはマンドリン属による独奏・重奏のための催しで、主催は「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」と同じく札幌市民芸術祭実行委員会・札幌市・財団法人札幌市教育文化財団（註1）の3者。札幌市民芸術祭は市民芸術・文化活動の振興を目的とした札幌市最大の文化事業であり、札幌市民劇場として企画が採用された各公演に加えて、音楽では他に吹奏楽、合唱、邦楽の各音楽祭と器楽／声楽の独奏者／独唱者を対象とする新人演奏会の5事業があり、美術・書道と文芸の催しも含めた中から「札幌市民芸術祭賞」（現「札幌市民芸術祭大賞」）と「札幌市民芸術祭奨励賞」が授与されます。

端的にいうと「札幌市内に主たる活動拠点を置く者」という参加資格上の制約はあるものの、マンドリン属の独奏・重奏を対象とした公的機関が主催する国内唯一のコンクールという貴重

な存在だったのですが、新人演奏会とは別にギターとマンドリン属のための音楽祭を設けたことに故・九島先生の尽力があったのはいうまでもありません。

しかし、毎回一定の応募があつてオーディションまで行なわれていたギター部門に対し、マンドリン部門の方は森田新支部長就任以前の14年間で独奏延べ16名、重奏延べ7組しか応募がなく、参加が皆無であった年度も3回ありました。それにも関わらず部会委員の数は双方同数であり、マンドリン部門の方が受賞機会が多いようにも見えることがギター部門からの反発を招いていたようです。

この音楽祭自体は日本マンドリン連盟北海道支部が関与する事業ではなかったのですが、支部長を含む支部役員が審査も担当する部会委員を委嘱されるのが慣例となっていました。

そもそも日本におけるマンドリン奏者の大半はイタリアの古典的なマンドリン・オーケストラを主体とするギター・マンドリン合奏の愛好者で占められていて、どちらかといえば独奏志向が強いギター愛好者と対等なレベルでコンクールの参加者募集を行なうことに無理があつたのは自明の理でした。

加えて札幌市内の各合奏団は、いずれも9～11月に自団体が開催している定期演奏会のために活動しているようなものですから、秋季のイベントに参加するのは消極的にならざるを得ないという事情もあつたと思います。

今だからこそ書きますが、森田新支部長は就任直後から札幌市の関係機関や他の部会委員と相当回数に及ぶ面談を重ねており、最終的に「札幌市民芸術祭ギター・マンドリン音楽祭」のギター部門とマンドリン部門を分離し、後者を春季に持つてくることで「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」と一体化した新しい催しとするのがベストであるとの結論に達したと聞きます。

その後、1995（平成7）年9月15日に開催された「札幌市民芸術祭ギター・マンドリン音楽祭」終了後の同音楽祭部会委員会で次年度よりギター部門とマンドリン部門を分離する方向が打ち出され、翌1996（平成8）年3月22日に開催された札幌市民芸術祭実行委員会で新たに「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」が新設されることが正式に決定されました。

さらに付言すると、森田新支部長としては平成9（1997）年2月の現・札幌コンサートホールk i t a r aの竣工を見据えており、同ホールの運営主体となることが決定していた財団法人札幌市芸術文化財団が財団法人札幌市教育文化財団に代わって札幌市民芸術祭の主催3者になる見通しを踏まえて、新しい音楽専用ホールでの継続的な行事開催をめざしていました。ちなみに財団法人札幌市教育文化財団は「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」や「札幌市民芸術祭ギター・マンドリン音楽祭」の会場となってきた札幌市教育文化会館の運営に当たっています。

筆者は森田主宰の弟子ですから多少割り引いて読んでいただいても構いませんが、以上の判断は現時点でもベストな選択であつたと確信しています。すなわち、札幌市の文化行政全般に多大な貢献をされた九島勝太郎先生亡き後、札幌市民劇場に応募しても公演企画が毎回採択される保証はなく、さらに基金がバックアップする仕組みができて長期にわたって財政面が万全とはいいい切れません。その一方で、九島先生が遺した貴重な公的行事である「札幌市民芸術祭ギター・マンドリン音楽祭」は存続の意義が問われる危機的な状況が続いており、抜本的な改善策が見当たらなかつたからです。こうして考えてみると新支部長には確かに先見の明があり、それを実現に導く実行力もあつたと評価してよいのではないのでしょうか。

以上は札幌市の文化行政の問題であり、事業年度の関係からも日本マンドリン連盟北海道支

部が主体的に動ける次元にはなかったのですが、九島先生の逝去直後であったこともあって一連の動きを新支部長の独断専行として非難する嫉妬混じりの感情的な反発が少なからず感じられました。

一方、こうした将来展望を抱いていた森田新支部長は、当然のことながら札幌市および関係機関が継続開催を納得し得るレベルの高い演奏をめざす方向に舵を切ろうとしますが、かねてより筆者が指摘してきたとおり、マンドリン・ギター合奏の世界には「より高い音楽表現をめざそう」とする奏者と「演奏を通じてストレスを発散したい」奏者という異なる目的を持つ人々が混在しており、両者が相容れないことは最初から目に見えていました。

ケーススタディ～北海道の場合～ 【V】崩壊編

このような状況で札幌プレクトラム・アンサンブルの2代目会長を襲った**田中稔夫氏**は「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」が抱えていた**第二の問題点を「政争の愚」として利用するために持ち出して来た**のです。

「札幌市民芸術祭ギター・マンドリン音楽祭」のマンドリン部門は1996（平成8）年度から「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」として分離され、同音楽祭に学生団体合同合奏と学生団体・社会団体合同演奏の2ステージを設ける形で「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」も事実上統合されました。

この「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」も前身の2つのイベントと同様、公的機関が主催するマンドリンの演奏会としては国内唯一の存在であり、その創設に尽力した最大の功労者は日本マンドリン連盟北海道支部2代目支部長に就任した弊会の森田太郎主宰であったことを今一度強調しておかなければなりません。

しかし「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」は今日まで続いているものの、札幌コンサートホールk i t a r aを会場として開催されたことは一度しかなく、独奏・重奏部門も「札幌市民芸術祭大賞」および「札幌市民芸術祭奨励賞」の受賞対象から外されてしまい、「生みの親」である森田主宰が思い描いていたのとは正反対の方向に転換してしまいました。より高い音楽表現をめざすのか、はたまた出演者が楽しめることに重きを置くのか、いずれも音楽祭というイベントが有する側面ですから善悪や正誤を論じることは不毛だと思いますが、森田主宰が前者を追求していたことは疑いないことから、それに反発して追い落としを図った以後の支部長以下の面々は前者の重要性を否定したということでしょう。

森田2代目支部長に対する反発は、早くも翌1997（平成9）年度の「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」の指揮者選びを巡って噴出します。ネタとして用いられたのは「札幌市民劇場マンドリン・コンサート」以来の合同合奏指揮者決定の慣例でした。

当時、札幌の社会人団体で学生団体・社会人団体合同合奏の指揮者を立てられる、すなわち全パートに亘ってメンバーが揃っており指揮者を支える首席奏者も出せる団体は、札幌プレクトラム・アンサンブル（以下「S. P. E.」と略す）、札幌マンドリン倶楽部（同「S. M. C.」）、札幌シンフォニカ・マンドリーノ（同「S. S. M.」）の3団体しかなく、各団体で毎年指揮を振っていた九島勝太郎・多田久志・**田中稔夫**（以上S. P. E.）、小村淳（S. M. C.）、森田太郎（S. S. M.）の5名から2名が立つローテーションが慣例化していました。

この状況は「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」のスタート時も同じでしたが、九島先生が逝去されたため微妙な変化が生じました。ここで両イベントを通じた指揮者の人選を見てみましょう。

- ・ 1992（平成4）年：小村（S. M. C.）／田中（S. P. E.）
- ・ 1993（平成5）年：森田（S. S. M.）／田中（S. P. E.）（註2）
- ・ 1994（平成6）年：多田（S. P. E.）／森田（S. S. M.）（註3）
- ・ 1995（平成7）年：小村（S. M. C.）／森田（S. S. M.）（註4）
- ・ 1996（平成8）年：多田（S. P. E.）／森田（S. S. M.）（註5）

続く1997（平成9）年度の「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」に際して、以上3団体は「年齢や経験から多田・田中・森田の3先生は別格として互選で1名に出していただき、残る1名については選定方法も含めて忌憚のない意見を募る」ということで合意しており、3名指揮者は練習時間の制約等で不評であったことから、ローテーションを均等化しようとするならば田中氏が登板して残る1名に小村氏を選ぶのが自然であったと思われました。

しかし、実際に指揮を務めたのは小村（S. M. C.）／森田（S. S. M.）の組み合わせだったのです。

1997（平成9）年度の「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」の指揮者選定に当たって、森田太郎支部長（札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭部会委員長を兼任）は学生団体・社会人団体合同合奏の指揮者に立つことができるのは、出身母体の合奏団の内部で自前の首席奏者を揃えることができる人物だけだと主張していました。これは、しっかりとした首席奏者の集団が中核を固めていなければ合同合奏は成立しないということで、各首席奏者にも学生奏者をリードする技量を求めていたようです。

このような考えを強調するに至った背景には、若手奏者が新団体を結成したものの、自分たちで奏者を育成する努力を怠り、既存団体の奏者を勧誘して安易に演奏成果をあげようとする事例が後を絶たないという事情がありました。

これに対して多田・森田の両委員が推した田中稔夫氏は多忙を辞退の第一の理由としながらも若手育成の必要性を強調し、この時点では自分が辞退して北海道教育大学札幌校マンドリンクラブの後輩でもある小村淳氏に活躍の場を与えたような雰囲気も感じられました。

その結果、指揮者としては田中氏が推さずとも選出の可能性があった小村氏と、「話し合いが付かないので新しい指揮者選びの初年度として支部長にお願いすべき」という田中氏の意見が通って森田支部長が選ばれたのです。

続く1998（平成10）年度の「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」の指揮者選定に当たり、田中稔夫氏は多田・森田両委員から強く推されたこともあって今度は二つ返事で引き受けましたが、残る1名の指揮者については再び若手を立てるべきと主張し、札幌シンフォニカ・マンドリーノからの起用を求めました。具体的に該当する人物は熊谷淳氏であったかと思いますが、これは無理難題の内政干渉であったといわざるを得ないでしょう。

そもそも札幌シンフォニカ・マンドリーノという団体は森田支部長が主宰しており、そのメ

ンバーは主宰を慕い、あるいは主宰が声を掛けたからこそ集っているのであって、以前に指揮に立ったことがあるとはいえ熊谷氏が育てたり集めたりした首席奏者集団など存在しません。もちろん、かねてから自身が主張してきた「指揮者の条件」を身内だからこそ厳格に適用する必要もあったかと思われまます。

結局、残る1名の指揮者は無理を承知で小村淳氏にお願いしたのですが、これで**田中氏**が育成すべきと主張する「若手」というのは小村氏ではないことが明らかとなりました。

こうした**田中氏**の一連の言動に呼応して**北山勝一**なる人物が登場します。

北山勝一氏は、かつて森田支部長が顧問を務めていた札幌旭丘高等学校マンドリンクラブ(当時)でマンドリンを始め、北海道大学に進学してチルコロ・マンドリニスティコ「アウロラ」に入部、卒業後は札幌シンフォニカ・マンドリーノに参加します。夫人も高校のクラブの後輩で森田夫妻が仲人を務めるなど、周囲からも親密な教え子の一人だと見られていました。

しかし、札幌シンフォニカ・マンドリーノでは部長という縁の下の力持ちは務めたものの、多士済々の門下生が揃う札幌シンフォニカ・マンドリーノでは指揮者やコンサートマスターといった華やかな活躍の場は得られずに不満を募らせていたようです。そして、1986(昭和61年)には**分裂騒動を引き起こしたものの従うメンバーは皆無で**、団体を去って札幌アカシヤマンドリンクラブに移り、同クラブでコンサートマスターなどを務めたものの、ここでも**他のメンバーと衝突して団体を去ることとなりました**。

要するに**能力も人望も乏しくせに、常に自分が中心にいて脚光を浴びていなければ気が済まないという世にありがちな困った人物だ**ということなのです。

どこの合奏団にも居場所が無かった北山氏にとって自分の存在を誇示できる数少ない場を提供していたのが行事の性格から個人参加も受け入れざるを得なかった「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」だということになりますが、その**北山氏**が上述の経緯で小村・**田中**両氏を指揮者に選んだ経緯が納得できないと日本マンドリン連盟北海道支部の総会場で騒ぎ立て、**恩師**である森田支部長を**誹謗中傷して罵倒し、攻撃するという信じ難い暴挙に出るに至ります**(この際の録音は筆者の手許にあり、近く音声ファイルに変換して別サイトで公表する予定です)。

何とも浅ましい話ですが、**北山氏**の動きが**田中氏**の言動と呼応したものであったか否かは断言できないものの、**田中氏**が事あるたびに「若手育成」を繰り返して主張してきた真意は、ここに至って明白になったのではないのでしょうか。

すなわち、札幌シンフォニカ・マンドリーノのような他との掛け持ちを嫌う演奏団体を内部から切り崩し、あわよくば分裂による新団体結成を誘い、既存団体に参加する若手奏者がどの団体の演奏会にも自由に出演できる雰囲気醸成、自分が2代目会長を襲った札幌プレクトラム・アンサンブルにも賛助出演を呼び込んで勢力を拡大するといった絵図であったのでしょうか、これは**北山氏**のような人物にとっては、まさに「我が意を得たり」であったと推測されます。

事実、以降の展開はそのような方向に進み、今日の日本マンドリン連盟北海道支部の腐敗に至っているのです。

1998(平成10)年2月11日に開催された日本マンドリン連盟北海道支部第29回総会における**北山勝一**氏による森田太郎支部長攻撃の内容たるや「前年に支部後援事業として開催されたクボタ・フィロ・マンドリーネン・オルケスター札幌公演に臨席しなかったのは支部長として不適格だ」といった荒唐無稽なものでした。森田支部長が同年春に心臓のバイパス手

術を受けたことは関係者には周知の事実でしたが、複数の名義後援者の一つに過ぎない組織の代表者が体調不良を押してまで臨席する義務があるものでしょうか。

この支部総会では任期満了に伴う支部役員の改選が行なわれる予定でしたが、北山氏に加えて西澤健治（現・堀健治）氏も「支部長には田中稔夫先生が適任と思う」と発言しています。これらが田中稔夫氏の差し金であったとは考えたくありませんが、堀健治氏は北海道教育大学札幌校マンドリンクラブOBで札幌プレクトラム・アンサンブルで指揮を振っていること、および北山勝一氏も現在は札幌プレクトラム・アンサンブルの会員であることを参考として書き添えておきます。

結局、支部役員改選は翌年に延期されましたが、1999（平成11）年度の「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」の学生団体・社会人団体合同合奏の指揮者選定に際しての田中稔夫氏の横暴ぶりは筆舌に尽くし難いものでした。

端的にいうと、人選を託された部会委員会で指揮者を引き受けることを固辞して議論を支部事務局に差し戻してしまい、差し戻された支部事務局では札幌プレクトラム・アンサンブルの五十嵐要義幹事長（当時）が「委員会が決定権を放棄して事務局に差し戻すのは筋違いもいいところ」と非難するマッチ・ポンプを行なって、森田支部長が主導する体制を壊そうとする意図を露骨に剥き出したのです。

最終的には1999（平成11）年2月11日に開催された日本マンドリン連盟北海道支部第30回総会で実施された投票で田中稔夫氏が3代目支部長に就任し、落選した森田2代目支部長は自らの音楽理念が受け入れられなかったとして全ての役職を辞して主宰する札幌シンフォニカ・マンドリーノ、札幌マンドリーノ・メリディアーナも団体会員を脱退し、以後、北海道支部とは一切の関係を絶つこととなります。

田中陣営の根回しは、かつて支部活動低迷のA級戦犯で金銭面の不祥事もあった前事務局長・永田幸弘氏（北海道教育大学札幌校マンドリンクラブOB）までもが久しぶりに姿を現して同氏に一票を投じたほど見事なものでした。ちなみに田中氏ですが、最終的には1999（平成11）年度の「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」の指揮者を引き受けており、やはり一連の言動は政治的な駆け引きであったと断じざるを得ません。

こうして選挙を多数決で制して3代目支部長に就任した田中稔夫氏は「これまでの役員選出は不公正だった」(!?)として選挙による選出を廃止し、選考委員会なる組織を設けて役員を密室選考に切り換えました。

また、森田2代目支部長時代は加盟各団体の運営実務に当たっている部長や幹事長（事情がある場合はその代理）で支部事務局を構成していたのに対し、田中3代目支部長は「やる気のある人材を登用する」と称して当時は加盟団体のメンバーでないばかりか、何らかの形で合奏団の運営に携わっている訳でもない北山勝一氏や西澤健治（現・堀健治）氏が支部役員に就任することとなりました。

信じ難いことでしょうが、20世紀末の日本社会に民主主義の象徴である選挙を廃止して『白い巨塔』さながらの密室選考を採択した文化団体の親睦組織があったという事実は、長く日本のマンドリン史に汚点として刻まれることになるでしょう（註6）。

結論と提言～わが国のマンドリン音楽振興のために～

冒頭で述べたとおり、我が国におけるマンドリン音楽の現状は連盟や協会といった統括組織が振興を図るような状況になく、そのような組織は先ず組織化そのものをめざすべきだと主張しました。

その後に挙げた日本マンドリン連盟北海道支部の実例で、公的機関の支援がある恵まれた状況下でも「よりよい演奏結果をめざそうとする愛好者」と「活動を通じて快樂を得ることを第一義とする愛好者」が混在している状況での組織運営は困難であることが御理解いただけたと思います。

以上を踏まえ、あるべき統括組織の組織形態を以下のように考えてみました。

1. 統括組織運営の大前提

各団体の歴史と独自の活動を尊重し、中立的な立場で相互の情報交換を取り持つのを第一義とする。

北海道支部のように支部役員の一部が団体の枠を超えて各方面に出入りし、それをもって親睦と交流が図られたと考えているかのような特殊な事例も見られるが、少人数で厳しい練習を積み高い演奏成果をめざそうとしている団体からすると、今まで模索してきた音楽の方向性を共有しているとはいいい難い他団体の奏者が演奏会直前になって乱入してくるのは迷惑という以外の何者でもない。

逆に気の合った仲間と楽しくポピュラー音楽を演奏することを望んでいる団体では、マンドリン・オリジナル曲で得た中途半端な原則論を振りかざす人間は歓迎されまい。もちろん、人数が必要だからと誰の参加でも大歓迎だという団体もあるだろう。

こうした各団体の音楽的な方向性や組織の在り方を相互に尊重するのが統括組織を運営する上での大前提である。

もちろん、オーナー団体の主宰者の運営方針に対して、会員による選挙で役職を決定している団体が「若手育成に反する」などと批判したりするのも筋違いであろう。

いずれにしても**自分たちが中心になって各団体の活動をリードしようとするような人物は、それこそ役員として不適格であり、そもそもレベルの知れたアマチュアが同じアマチュアを仕切ろうとするのが誤り**なのである。

2. 本部役員（理事）および各支部長に対する考え方

1. に基づけば各団体における次のような人物は（ア）～（エ）の順で**自動的に**名誉職である本部役員として**推挙されるべき**であって、**選挙も役員選考委員会も不要**である。もちろん推挙を機に団体または個人の加盟を図るべきであるのはいうまでもない。

支部長と副支部長は、そのようにして推挙された本部役員の内選によって決定する。

適任者が定数を上回る場合には加盟が早い順に推挙するものとし、場合によっては本人の同意を得て最年長者を本部顧問に格上げする形で対応する。

（ア）演奏団体を主宰する人物（団体のオーナー）

（イ）演奏団体で常任指揮者的な地位にある人物（団体の音楽指導者）

（ウ）マンドリン音楽に理解があつて社会的に高い地位にある人物

（エ）マンドリン以外の音楽関係者と交流がある人物

3. 支部役員（幹事）に対する考え方

支部役員（幹事）で支部事務局を構成し、支部運営の実務に従事する。**支部組織に理事は不要**である。

支部役員（幹事）には各演奏団体の実務を統括する部長、幹事長、代表者（音楽指導者を除く）が**任期についても各団体の役職と連動する形で自動的に就任する**ものとする。

各演奏団体の事情もあるため、副部長や副幹事長など各団体が指名した人物が代理を務めることもあり得るが、職務は幹事と同等であっても肩書きはあくまでも幹事代理とする。

支部役員（幹事）についても選挙や役員選考委員会は不要であり、各団体の事情を尊重しつつ円満に支部役員が決定し、話し合いによって平等・公平に職務を分担できる。

4. 支部事務局長に対する考え方

支部事務局長は、

(ア) 本部役員（理事会）による指名（現職幹事とは限らない）

(イ) 支部役員（幹事会）の互選

の両者が一致せず、話し合いによる調整が付かない場合のみ、支部総会で両者を候補者として決を求めることとする。

なお、**支部事務局長は必ずしも本部役員に就任する必要はない**ので、推挙する場合でも優先順は2. の（エ）の次である。

最後になりましたが、理事と幹事の相違を明確に理解していない向きが多いようなので、両者の違いを述べておくことにしましょう。

・理事

英語表記は「director」で、組織運営の戦略的な方向性を導くのが役割です。

「director」は「指揮者」も指しますが、音楽関係組織の理事は音楽指導者が就くべき役職であることが分かるでしょう。

理事は会社の取締役役に相当しますが、代表取締役が社長を務める場合が大半であるように、組織の代表者は理事の中から選ばれるのが自然なのです。

・幹事

英語表記は「secretary」で、事務など組織の戦術的な実務に専従する者を指します。

政治の世界における保守政党の「幹事」と革新政党の「書記」は、いずれも「secretary」であり、なぜ「幹事長・書記長会談」といった機関で調整が行なわれるのかなどが理解できるでしょう。

このように理事と幹事には明確な相違があり、前者はどちらかという指揮者（音楽指導者）が、後者は部長（マネージャー）が就くべき役職であることが分かるかと思います。

ちなみに**日本マンドリン連盟北海道支部**には世にも珍しい理事兼幹事が1名いますが（**北山勝一氏**）、この人物は演奏団体における音楽指導者でも、事務職／マネージャー職でもないのです。

まさに、かつて東条英機が陸軍参謀総長（軍令担当）と陸軍大臣（軍政担当）を兼任したの

に匹敵する奇天烈な存在だといわざるを得ません。

来年はこのような無知無能な馬鹿者共が一掃され、すばらしい一年になることを祈って筆を置きたいと思います。

(註1) 当時：現在は同財団に代わって財団法人札幌市芸術文化財団が主催者に加わっている

(註2) 田中氏は入院した九島先生の代打として急遽登坂

(註3) 九島先生追悼演奏会として開催

(註4) ほかに熊谷淳 (S. S. M.) 氏を加えた3名体制

(註5) 「札幌市民芸術祭マンドリン音楽祭」初年度

(註6) 表記・平成21(2009)年の改選を最後に推薦も選考も行なわれないことになり、
状況はさらに悪化、**公的行事の実務組織として恥ずべき最悪の運営となっている**

※本小論は平成20(2008)年12月3日から12月30日にかけて当マンドリン資料室内のコンテンツ「資料室だより」で17回に分けて発表した連載をまとめたものです。